

仕事、自分事、社会事 —自分の未来は自分で創れる

Can I help you?

地方公務員として、一市民として、NPOの理事としての視座から、目に見えるカタチや目に見えないカンケイについての「きっかけ」の創造に取り組んでいます。

また、青森県と東北をフィールドに市民と行政のすき間を埋める『きっかけクリエイター』としての視点から「コトづくり」を進め、交流人口をさらに発展させた『関係人口』の増加に取り組んでいます。もちろん、時間の寄付（無報酬）で！
同時に、「子育て」や「父親支援」の2つのNPO活動をはじめとした市民活動や行政での実践と経験を公私融合して「第三の大人」の役割を発信しています。

ここで言う「第三の大人」とは、「親でもない、先生でもない、地域の子どもたちのために、そして社会のために自分を活か

す力『公共力』を持ち、共生のカタチを作れる人」を指しています。

積極的に講演や執筆に取り組み、「伝える」活動を進めています。テーマのキーワードは、「子育て」、「父親支援」、「まちづくり」、「行政」、「公務員」です。

右の文章は、「齊藤望」という旗を立て、自身の存在や活動をオーブンにするために開設している『カタチとカンケイ創造オフィスnozom.info（ノゾム・インフォ）』というブログの冒頭に書いてあるものだ。

ふざけた公務員だと思われたかもしれないが、僕は面白いことが大好きで、いたって真剣に真面目にふざけている。その認識の上で読み進めていただければ嬉しい。

ラッキーナンバーはお持ちですか？

僕のラッキーナンバーは「3」だ。



齊藤 望

平川市企画財政部税務課地籍調査係長

【さいとう・のぞむ】

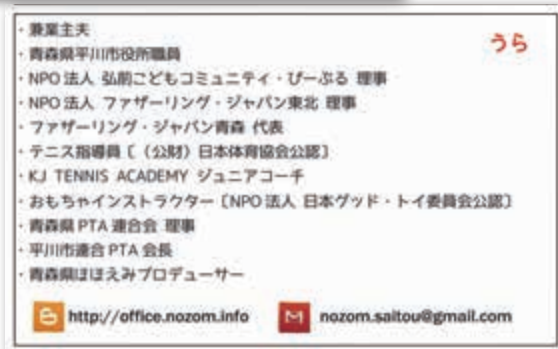
1971年青森県平川市生まれ。1993年青森県碓ヶ関村役場入庁。平川市役所では企画財政課、収納課を経て現職。弘前市と仙台市に事務所を置くNPO法人の理事を務め、子育て支援と父親支援を進めている。人に伝えることに使命感を持ち、テニス指導員、おもちゃインストラクターの資格を生かして「子どもを真ん中」に置いた活動を展開。毎日blogを更新中！<http://office.nozom.info/>

日本三大〇〇、〇〇三分類、第三の〇〇、ことわざや慣用語など「3」という数字は日本人が好む傾向にある。僕も純粋な日本人の証か、物事を3つに分類したり、統合したりと、なにかと「3」で考える癖がある。2つだと物足りなくて4つだとちょっと多い。自分にとっては「3」がちよっどいい。考え事をする時は「なぜ？」を3回繰り返し、「なぜなら」を3つ考えてポイントを3つに整理する。その際も語呂を揃えたり、韻を踏んだりして遊びを入れてしまう。

例えば、「前向き・直向き・ムキムキ」。これは、ライフを楽しむために僕が設定しているライフテーマで、韻を踏んだ3つの言葉で表している。その意味は「物事に対して積極的な姿勢を保ち、いかなる忍耐強さと強い心と身体を持つ」ということだ。



ソーシャルな活動で使っている
2枚目の名刺



仕事、自分事、 社会事の3つの「事」

仕事（以下、ワーク）、自分事（以下、ライフ）、社会事（以下、ソーシャル）の3つの「事」を意識して生活している。自分のワークは地方公務員として平川市役所の職員で、それ以外のライフやソーシャルの活動は「役割」という位置づけで整理している。

現在のソーシャルの役割を棚卸しすると次のようになる。

- ・ NPO 法人 弘前子どもコミュニティ・びーぶる 理事

- ・ NPO 法人 ファザリング・ジャパン 東北理事

- ・ ファザリング・ジャパン青森代表

- ・ 平川市連合PTA会長（青森県PTA連合会理事、碓ヶ関中学校PTA会長）

- ・ 川向町内会役員（会計）

- ・ KJ TENNIS ACADEMY ジュニアコーチ（公財）日本体育協会公認テニス指導員

- ・ おもちゃインストラクター

- ・ 日本グッド・トイ委員会公認

- ・ 青森中央学院大学ゲスト講師

- ・ 平川市各種委員（子ども・子育て会議、食育推進協議会、スポーツ推進審議会、学校給食センター運営委員）

ワークで使う名刺以外に「2枚目の名刺」を持ち歩いている。地方公務員の副業（兼業）は地方公務員法で制限されているが、非営利活動として「複」業することは問題ない。収入を得ることを目的とした副業ではなく複数のソーシャルな役割を持つ複業だ。

ワークのアイデアはライフやソーシャルの活動から生まれることが多い。2枚目の名刺による活動が、本業である1枚目の名刺の質を上げている。ライフやソーシャルが充実することでワークが充実する。この3つの「事」に境界線を作らず、視野を広く持つことで、それぞれが補完し、相乗効果を生んでいる。

また、ソーシャルな組織に携わること

は、組織運営、ネットワークの構築、コミュニケーション能力、プレゼン力の向上など、ワークへのメリットが非常に多い。

声を形にできる仕事

「ずばり、公務員の魅力は？」と聞かれたら、「政策の立案と実施に関わることができること」と答える。平川市には「まちづくり職員提案」という制度がある。その目的は、市の長期的な展望から、自らが真に自立したまちづくりを進めるために必要なアイデアを職員から募集し、先駆的及び創造的な振興施策並びに業務改善の取組に反映させることだ。

平成26年度に「未来の担い手発掘・育成・支援事業」を提案し、採択されて平成27年度から実施されている。この提案に至った背景には、未婚化と高齢化が進み、大人が孤立を深めていく中で停滞した市民活動の状況を危惧した市民の声があった。市民の声は政策立案のベースとなるもので、前述の質問に対する答えを換言すれば「市民の声を形にできること」と言えるだろう。

サイド・コミュニティを生かした声の集め方

家族と職場以外のコミュニティを「サイド・コミュニティ」と位置づけている。それが声の集合体で、暮らしの中で困ったことや市の政策への疑問や提案を直接聴くこ



とができる。

声を形にするためには老若男女の幅広い声を集めなければいけない。そのために、僕は複数のソーシャルな役割を担っていると言ってもいい。例えば、テニスコーチでは3歳児から20代まで、PTAやNPOにおける活動では10代から50代まで、町内会活動では30代から80代までの声を直接耳にすることが可能だ。他にも、「東北まちづくりオフサイトミーティング」といった同業他社のコミュニティに所属しているが、

それぞれのコミュニティに感度の高いアンテナを張り、複数の分野のチャンネルを持つことで多くの声を集めることができていく。特に、視点や感性の違う土の人（その土地に根づく生活者）の声を集めることと風の人（その土地を訪れる移住者や来訪者）の声を集めることが大切だ。

声を集める際に気をつけることは、前例、先入観、既成概念を捨て、常識を疑いながら、役所（箱）を外から見ることだ。いわゆるアウトボックス思考だ。公務員としての視点、生活者としての視点、公と共の隙間を埋めるソーシャルの担い手としての視点も忘れてはいけない。

また、最近では地域の方々から「ありがとう」と感謝の言葉を頂く機会が増えてきた。地域の「ありがとう」を集めることが地方公務員のあるべき仕事なのではないかと感じている。

頼まれごととは試されごと

あるセミナーで僕のNPO活動の事例発表を聴いた青森中央学院大学の教員と縁があつて、毎年行政学の授業にゲスト講師として招かれている。「現役公務員が語る公務員のこと」と題して講義をして今年で6年目を迎える。

また、公務員志望の学生を対象にしたゼミや公務員講座では「公務員の取扱説明書（トリセツ）」と題した講義や意見交換を実

施している。大学生に、現役の地方公務員としてリアルな仕事を伝えるとともに、平川市役所職員の広告塔として優秀な職員を集めることも使命だと感じている。

授業の最後に質疑応答がある。大学生から一番多い質問は「なぜ、仕事が終わった夜間やせつかくの休みの日にボランティアや勉強会などの活動をするのですか？」というものだ。僕は「経験したことがないことと地域の声を集めるためです」と答える。経験のないことを経験したい。逆に経験したことがある場合は適任者を探して任せることにしている。

「頼まれごととは試されごと」。僕はソーシャルの部分で頼まれごとがあつた時は基本的に断らない。「自分は試されているのだから、相手の期待を良い意味で裏切つてやるう」という気持ちで快諾している。頼まれた役割と自分の能力を天秤にかけることなく、チェンジはチャンスと捉えている。そのチャンスはサード・コミュニティで人と出会うことから生まれる。

振り返ってみるとソーシャルな役割が自分の成長と未来を切り拓き、現在のキャリアを形成している。ただ、現在は3つの判断基準で引き受けることにしている。そこにチャレンジはあるか、それは面白いのか、そして一番重要視するのが「なぜ自分に声を掛けたのか」に対する答えだ。上から目線かもしれないが、想像以上に役割が増えてきたことへの対処だ。

役割の循環

子どもが生まれたのをきっかけに、子供会やPTAなどの小さいコミュニティを通じて地域という大きいコミュニティに関わる機会が多くなっていった。いわゆる「地域デビュー」を果たし、PTA会長をはじめNPOの理事に就くなど複数の社会的な役割を担うまでになっていた。20年前の自分の姿からは想像もつかない現状に驚いている。

地域で活動していくうちに気づいたことがある。役割には循環があるということだ。

役割には、見つけられる ↓ 打診される
↓ 引き受ける ↓ 育てられる ↓ 任せられる
↓ 探す ↓ 見つける ↓ 打診する ↓
↓ 任せる ↓ 支援するという循環がある。というのも、僕も最初は見つけられたのだ。

PTA活動に参加しているうちに小学校のPTA副会長への就任依頼があった。当時のPTA会長に見つけられ、打診され、引き受け、育てられ、任せられた。その2年後にはPTA会長を引き受け2年務めた。退任にあたっては、後任者を探し、見つけ、打診し、任せ、支援しながら後継者を育てていくという「役割の循環」に沿って進めた。

ソーシャルな役割の活動をブログで公開することで、新しい役割が巡ってくる。自らが自らのロールモデルとなって更新を続けるイメージだ。

人との出会いが新しいステージへの入口

前述の「役割の循環」のように、新しいステージに立つ時には必ず人との出会いがある。また、人との出会いは言葉との出会いで、背中を押してくれるたくさんの言葉のプレゼントを頂いた。

現在、「弘前子どもコミュニティ・ぴーぶる」と「ファザリング・ジャパン東北」の2つのNPO法人の理事を務めている。

NPO法人の理事は、「事業・予算・組織編制に関する方針決定」「事務局への助言」や「現場の支援」「外部への広報」が基本的な役割として挙げられる。

2015年、NPO法人「ファザリング・ジャパン東北」の理事への就任依頼があった。この時も新しいステージに引っ張ってくれる人がいた。「ファザリング・ジャパン東北」は、育児も仕事も人生も笑って楽しむ父親を増やすことをミッションに掲げ、東北という地域に合わせたパスタイルを東北6県で創造していくNPO法人だ。

理事の就任にあたっては、家族と相談して就任を決めた。特に「ファザリング・ジャパン東北」に関しては、青森県内から東北へと活動範囲が広がることで、家を空ける時間が多くなることが気にかかった。僕が挑戦したいことを家族に伝えると「がんばって！」という応援が返ってきた。子

生きた時間の使い方

育てをきっかけに就いたNPO法人の理事という役割は、必然的な流れに乗り父親支援という新しいステージを加えた。

1日は24時間、時間は誰にでも公平だ。1日24時間の中で睡眠、身支度、食事、仕事などの生活維持に必要な時間を差し引いた後に残る自分の裁量で自由に使える時間を「可処分時間」と言う。ソーシャルの役割が増えてくると可処分時間が少なくなる。そこで重要となることは時間管理ではなくて時間の生かし方だ。

子どもが生まれてからは子ども中心の生活となり、自分でもその生活に満足していた。時代は「平成の大合併」、職場では「どこどこがくつつくらしい」などの市町村合併の話題が持ち上がった。市町村合併を想像した時、実は自分自身のスキルに不安を感じ、仕事上の武器が欲しいと思っていた。

そこで、自分の得意分野である電算系、特にインターネット活用やホームページ作成の知識の習得を図ることにした。ところが、自分の時間の使い方を24時間の円グラフにしてみると勉強の時間なんてどこにもないことに気づいた。

当時は子どもと同じ時間に寝ていたので平均9時間の睡眠時間だった。僕は本から知恵を借りようと思い、書店へ向かって

時間の使い方についての本を探した。そこで「24時間の使い方」という本にピンポイントで出会ってしまった。実はこれが僕の読書習慣の始まりでもあった。答えは明快で「早く寝ているのだから、早く起きればよい」ということだった。

すっかり読書が好きになった僕は早起きしてウェブ系の本を読み漁り、独学でHTML言語を習得し、まずは自分のホームページを立ち上げ、運営と管理ができるようになり、職場のホームページの構築・運営・管理を任されるまでになった。そのスキルは現在も自らのブログ運営に役立っている。

自分の行動を記録していた手帳は、ライフ、ワーク、ソーシャルの優先順位を明確にし、目標を書くことで予定に変換し、達成するためのツールに変わっていた。

早寝早起きの最大のメリットは健康維持である。規則正しいリズムで生活を送ることで「寝る・食べる・動く」のバランスが取れて体型や体力も維持できている。

また、自分のバッテリーの表示を見逃さず、バッテリーが切れる前に充電することを忘れない。疲れた時のために自分の充電方法を持つことが大切で、僕は身体を動かすことでリフレッシュするアグレッシブレスト（積極的休養）を取り入れていて、昨年からは登山を始めた。

この生活が生まれたのは、子どもたちが生まれきてくれたおかげだ。

ワイフ・サイフ・バランス

ソーシャルな役割を果たすためには、活動時間の確保の他に2つ大切な要因がある。「ワイフ」と「サイフ」だ。読んで字のごとく妻とお金のバランスのことだ。家を空けることになるので妻の応援なしには活動は継続できない。話し合いの上で育児と家事を役割分担して、妻の応援を取り付けることだ。

また、ソーシャルな役割は非営利活動つまり無報酬、手弁当のボランティア活動なので、ポケットマネーという予算の中からいかにして最少の費用で最大の効果を挙げることが重要となる。

役割をやり遂げた達成感がなよりの報酬だ。それは未来の自分への投資でもあり、投資した時間やお金は経験や成長に換価（リターン）できると意識することが次の活動につながる。

ちなみに、「夫」という字を上下に反転すると「𠂔」になる。「会社から給料を運ぶだけの人間にはなるな」というメッセージと受け止める。

未来は自分たちの力で創れる

子どもたちのおかげで地域や社会との関わりを持つことができた。そして、人生における時間の生かし方や優先順位が変わ

ったことで自分がやりたいこと、やらなきゃいけないことが明確になった。その結果、自分の未来は変わった。子どもたちが「自分の未来は自分で創れる」ってことを教えてくれた。今度は「自分の未来は自分の力で創れる」ってことを自分が子どもたちに伝える番だ。

最後に、人生のミッションを宣言して終わりたい。

親を育てる親でありたい。

大人を育てる大人でありたい。

公務員を育てる公務員でありたい。



アグレッシブレストで仲間と登山を楽しむ